

教務だより

2013年9月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

WIN-WINの団体戦

茗溪塾塾長 宇野 雅春

2004年のアテネオリンピックで日本の男子体操が28年ぶりに金メダルに返り咲いて、世界中をあっと言わせたことがありました。(先日ドキュメンタリー番組で放送されました)

その時は指導者の「気づき」が確かに大きな要因でした。戦後長く「お家芸」と呼ばれ常に金メダリストを出していた日本の体操が、2004年まで28年間もなぜ停滞していたのか？指導者たちはその当時、常にトップにいたソビエト連邦の「練習マニュアル」を見て驚きます。そのテキストには、かつての日本の体操の技術がそのまま使われていたからです。フォームを大切に、「正しい姿勢」を徹底していくやり方です。それ以降フォームを常に大切に、そこに集中する練習法が実施されるようになりました。日本の体操の「美しさ」と「正確さ」が徐々に復活してきたのです。そうした指導改革の中から次々とオリンピック選手が育ってきました。

でも「金メダル」に結び付いたのはその指導者側の努力だけでなく、選手の金メダルを取ろうという「熱い思い」があったということです。その時のリーダーは「金メダル」への確信を持って練習に励んでいました。特に団体優勝を意識した練習が繰り返されました。団体戦本番を意識して何度もくり返し練習して妥協しないリーダーの姿勢に、徐々にチームのメンバー全員が触発されていきます。一人の熱意が共通の目標となってチームに浸透していったのです。床運動で抜擢された中野選手が練習で結果が出ず悩んでいるときも、全員で朝早くから練習を始めて「練習しやすい環境」を作ったりします。多少、諦めかけていた中野選手は仲間の配慮に気がつき、新たな決意を固めます。試合当日最初の床運動で中野選手は高得点を出します。それが大きな相乗効果を生み出します。優勝候補の中国の選手がミスを連発するなかで、日本の選手は次々と高得点を挙げ、試合前には入賞さえ予想されていなかったのに最後はなんと「金メダル」を取ってしまうのです。選手の力そしてチームの固い団結力、それを率いるコーチ陣全てが意欲的な姿勢で前向きに結ばれ、優勝への道を切り開きました。体操は孤独な競技のようですが、一人では立ち向かえないむしろ団体競技といえます。アテネの金メダルは「チーム」ということの大切さを感じられるエピソードであり、良いコーチ陣と良い選手陣の総合力が成し得た業績だと思います。

受験も団体戦です。一人ひとりの努力が、ともに頑張る力を得たとき、そこで生まれる相乗効果は、計り知れないくらいに大きいということです。受験は他人を蹴落として自分が勝利するスポーツの試合(Win-Lose)ではありません。互いに協力し互いに努力し共に成功する Win-Win の関係がそこでは理想です。だれかが頑張りはじめることが、全体に影響し、周りの奮起を促します。そしてそれは交互に波及し、さらに高い位置にチームを導いていきます。受験指導の中で一番大切なことが、このチーム作りです。指導側に単に強制された「勉強」からは、このチームワークは生まれてきません。嫌々歯を食いしばって、頑張るだけでは、本当のレベルアップは望めないでしょう。夏期合宿では、泊まり込むということもあって「チーム」が意識されやすい状況にありました。今年も友だちに触発され、勉強法や精神力で大きく成長する生徒を、たくさん目の当たりにすることができました。ここからは、夏を経て一回り成長した生徒たちが、受験に向けてさらに前へ進んでいく時期になります。夏を整理しながら Win-Win の関係を作っていきます。そこでは相手の合格も祝福してあげることができます。自分の自己目標を達成することには他人を蹴落とすという行為は必要ないからです。先生と生徒の間も Win-Win です。生徒の合格は、先生の存在意義につながるものでもあり、心から合格を願っているという点では、生徒本人とほぼ同じです。生涯にそんなに沢山はない Win-Win の共同作業…「合格」という喜びで終わらせることができたらと切に思います。